気楽に読めて予期せぬ知識を得られるラノベ…ラノベから専門書へ？

西村公伸（機械工学科）

タイトル：『青春ブタ野郎はプチデビル後輩の夢を見ない』
著者　　：鴨志田 一
イラスト：溝口 ケージ
発行　　：株式会社 KADOKAWA
レーベル：電撃文庫

気楽に読める本として最近ライトノベル（ラノベ）が流行っていて、通勤途中の数十分、半分寝ながら読むには都合の良い本だ。ラノベに限らず、色々読んできたが、自分から求めるのでなく、予期せぬところで意外と知らないこと（雑学）を教えてくれるところがよい。面白い本、自分の知らない世界を紹介してくれる本は何度も読み返す。数年前、映画で話題になった「真夏のオリオン」の元の元の本の一つ「鉄の棺」もその一つだ。しかし、この本は字が多い。降りる駅が近づくと焦って飛ばし読みをする必要がある。その点、「ラノベ」、これはいい。途中でやめて「また明日」になっても苦にならない。ラノベを読み始めたきっかけは、アニメで面白い題材がありその元本を読んでみようと思ったからだ。その中で、何度も読み返している 2 冊（厳密には 4 冊）を紹介したい。

一冊目は「無彩限のファントム・ワールド」で、3 巻まである。が、読んだのは 2 巻まで、3 回程度読み返した。その内、第 1 巻がアニメで放映され、紹介したいのはこの第 1 巻である。この本の主題は、ある種のウィルスの蔓延によって、これまで人間には視覚的に認識できなかった存在が、幻影（ファントム）として認識され、実体化するようになった。この実体化は、記憶に基づいて脳の機能によって映像化されて認識されるものである。話は、主人公ら特殊能力を持つ高校生が、人間に危害を加えるそのファントムを退治するという話である。ここで面白いのは、「認識により実体化する」という概念である。これは、観測されて初めて実体化するという量子力学の世界とも共通する。これは、人間の記憶と深くかかわって、記憶によって存在が確定されるという考えに至っている。人間の記憶は、体で覚える「手続き記憶」と頭で覚える「宣言的記憶」に大別され、後者はさらに「意味記憶」と「エピソード記憶」に分けられる。この本の最終章辺りでは、ファントムによりこうした記憶を取り去られることによりその人の存在が消滅し、同時に他者の記憶からも消え去り、人類滅亡の危機に至っている。全く、実体のないような話に思えるが、人間の「意思や思い」はその人の記憶、更に「集合的無意識」に深くかかわるであろうこと、そして、それを支えるのが言語であるなら、この機会に「心理学」を勉強してみようという意欲を駆り立てる一冊になるのではないだろうか？

次の一冊は、つい最近アニメ化され、劇場版も制作される「青ブタシリーズ」で、正式には、「青春ブタ野郎は〇〇〇〇の夢を見ない」である。〇〇〇〇は巻ごとに変わっている。話題は各巻ごとに完結しながら、ストーリーが続いていく作品で、9 巻近く出ているのではないだろうか？多分、第 5 巻あたりまでがアニメ化されていると思う。思春期症候群をテーマに、ネット社会での生き方や自己と他者との関係における人の意識の在り方と、その意識によって引き起こされる現象とのかかわりを描いている。面白いのは、こうした現象の説明に、物理学や量子力学で知られている「シュレディンガーの猫」や「ラプラスの悪魔」、「観測による実体化」や「量子間の瞬時の情報共有」などミクロの世界での現象を引き合いに出し、「マクロの世界で起こったなら、こんなこともあり得る」と説明にならない説明をしている。実は、アニメを最初に見て、より詳細を知りたいと思い、第 2 巻と第 3 巻を読んだに過ぎないが、普通の高校生が、周囲の空気を読みながら自分の立ち位置を築いていく日々の生活の中で、平穏に生きるために「自己の存在を目立たなくする」、「居場所の確保のため周りの空気を読む」、「自分の内にある相反する感情の葛藤」など多彩な心情を採り上げている。その究極の影響として生じた「実態を失う」、「未来予知」、「ドッペルゲンガー（重複存在）」といった事件を解決していくストーリーである。

「ラノベ」、ちょっとした暇に、気軽に読める本、思わぬ雑学と興味を引き起こしてくれる。いかがですか？